

両面価値的性差別主義が男女の食事勘定額に及ぼす影響について

○田中 咲妃¹・赤澤 淳子¹・福留 広大²

(福山大学大学院 人間科学研究科) (聖カタリナ大学)

問題と目的

ジェンダー・ステレオタイプは、特に男女一対一になったときに顕著になると指摘されている(土肥, 2004)。また, Glick & Fiske (1996) は, 好意的性差別主義(以下BSとする)を「女性をステレオタイプに捉え, 制限された役割の中で見るという点において性差別的であるが, 主観的には受け手に対して肯定的であり, 一般的に向社会的行動(例: 援助)や親密さを求める行動(例: 自己開示)を誘発する傾向がある。」とした。そこで, 本研究では, 男女グループとデート場面における食事勘定額に, ジェンダー・ステレオタイプの反映による金額差がみられるかについて検討することとした。具体的には, 性別とBSの傾向と食事場面(男女グループ・デート)により食事勘定額に差異がみられるのかについて検討することを目的とした。

方法

参加者 大学生の男性19名, 女性25名, その他1名の計46名であった。平均年齢は18.39歳($SD = 0.58$)であった。

手続き 大学の講義内で, 大学生に調査協力を依頼した。

調査内容 場面想定の違いによる食事勘定額 デートの食事場面と男女グループ(男女各3名)の食事場면을想定させ, 自分と異性の各支払金額を決めるよう求めた。回答方法は, 土肥(2006)にならい, 男女別の食事勘定額を9種類の中から1つ選択してもらった。

両面価値的性差別の測定 Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版(宇井・山本, 2001)に含まれるBSの11項目の尺度を使用し, 6件法で回答を求めた。

倫理的配慮 調査は無記名式, 回答は任意であり, 回答の拒否や, 中断による不利益は調査協力者に生じないことなどを紙面に明記し, 口頭でも伝えた。

分析方法 統計解析ソフト IBM SPSS Statistics24 を用いて3要因分散分析を行った。

結果

男女間のBS傾向の合計点の平均値に有意差がなかったため, 共通の平均値($M = 32.91$)より高い者を高群, 低い者を低群とした。そして, 2(性別: 男性・女性)×2(BS: 高群・低群)×2(食事場面での食事勘定額: デート場面・男女グループ場面)の3要因混合分散分析を行った。その結果, 性別の主効果($F(1, 40) = 40.98, p < .001, \eta_p^2 = 0.51$)と食事場面の主効果($F(1, 40) = 7.64, p = .009, \eta_p^2 = .16$), お

よび性別と食事場面の交互作用($F(1, 40) = 5.27, p = .027, \eta_p^2 = .12$)が有意であった。単純主効果検定の結果, 両場面における性別の単純主効果が有意であり, デート場面では女性($M = 4.96$)より男性($M = 7.21$)の方が有意に多かった。男女グループ場面においても, 女性($M = 4.85$)より男性($M = 6.11$)の方が有意に多かった。また, 食事場面×性別×BSの二次の交互作用が有意傾向であった($F(1, 40) = 3.236, p = .08, \eta_p^2 = 0.075$)。単純主効果検定の結果, BS低群, 高群の男性(BS低群: $M = 7.25$; BS高群: $M = 7.18$)共にBS低群, 高群の女性(BS低群: $M = 4.92$; BS高群: $M = 5.00$)より有意に多い金額を選択した。男女グループ場面の食事勘定額は, BS高群の男性($M = 6.64$)が, BS低群, 高群の女性(BS低群: $M = 5.00$; BS高群: $M = 4.69$)より有意に多かった。さらに, BS低群の男性のみ, 男女グループ場面($M = 5.38$)よりデート場面($M = 7.25$)において有意に多い食事勘定額を選択した。BS高群の男性とBS高群・低群の女性は, 両場面の食事勘定額に有意差はみられず, BS高群の男性は, 女性より多い金額を, 女性は両群ともに割り勘の金額を選択した。

考察

性別とBSの傾向と食事場面による食事勘定額の差異について検討した結果, 本研究で, 性別による食事勘定額の差異が示され, 女性よりも男性の方が多く払っていた。男女グループ場面も男性は女性より多く払うことが示され, 土肥(2004)の結果とも一致した。また, 赤澤(2000)では, 男性は女性より好意を持つ異性と食事の時に奢ろうと思う, と回答した者の比率が高かった。本研究でもデート場面において同様の結果が示された。さらに, BSの高い男性では食事場面による食事勘定額の差異はみられず, BS低群の男性では場面による差が示され, 男女グループ場面よりデート場面において食事勘定額が多かった。つまり, 好意的性差別意識が高い男性においては, 場面を問わず性役割に沿った行動をとることが明らかとなった。

引用文献

土肥 伊都子 (2006). 飲酒の勘定額にみるジェンダー・ステレオタイプ: 女性性・男性性との関連 研究紀要. 文科学・自然科学篇(神戸松蔭女子学院大学) 47, 61-77

他